女性乳がん体験者の「病の語り」およびそれに関わる要因

―計量テキスト分析を用いて―

駿地眞由美（追手門学院大学心理学部）

キーワード：乳がん，病の語り，計量テキスト分析

目　的

乳がんはわが国の女性のがんの中で最多を占め、長期にわたって心身の危機をもたらしうる事態である。その体験がどのようなものであり、それに関わる要因が何であるのかを、体験者の主観に基づいて理解することは、援助を考えるうえでも必要不可欠であろう。本研究では、体験者による「病いの語り」を分析することで、乳がんという病の体験にアプローチする。その際、(1)診断時の年代、(2)診断時からの経過年数、(3)治療法別に分析を試みることで、それらによる病の語りの特徴や相違を検討したい。

方　法

分析対象

NPO 法人「健康と病いの語りディペックス・ジャパン」による「健康と病いの語りデータアーカイブ」のうち、女性乳がん体験者 47 人（平均年齢 50.49 歳、SD=11.30）の語りデータを用いた。診断からの経過年数は、平均 4.68 年（SD=3.45）であった。本データは、身体の異常に気づいてから今までのことを体験者自身が自由に話し、インタビュアーが補足的に質問するというインタビュー形式で成っている。本研究では、体験者とインタビュアーの一回のやりとりを一つの単位とし、そのうち体験者の語りのみを分析対象（ケース）とした。

分析は、(1) 診断時の年代（20・30 代：n=16、40 代：n=19、50 代以上：n=12）、(2) 診断時からの経過年数（5 年以上：n=23、5 年未満：n=24）、(3) 治療法の別：手術法（温存：n=20、切除：n=19、切除+再建 n=5：無 n=3）・化学療法（有：n=34、無：n=14）・ホルモン療法（有：n=30、無：n=17）・放射線療法（有：n=23、無：n=24）で行った。

なお、データの利用および研究にあたっては、ディペックス・ジャパンによる倫理審査を受け、承認を得た。匿名化されたテキストデータのみを、統計的手法を用いて処理することで、個人を特定できないよう最大限の配慮を行っている。

分析方法

樋口（2004）による日本語形態素解析ソフト KH Corder（Ver.2.）を用い、計量テキスト分析を行った。分析に用いた品詞は名詞であり、「年」「回」等、単独では意味が成立しない語などを除き、また、同義語の定義を行って、データを整理した。その後、分析対象（1）～（3）について、それぞれの語りのキーワードやテーマを明らかにすべく、①各頻出語 100 位までのリストを作成し、②それぞれについて階層的クラスター分析（Ward 法・Jaccard 係数）を行い、③Jaccard の類似性測度によって語りの特徴語を検索した。さらに、語りの内容を比較するため、④抽出語をカテゴリー分けし（コーディング・ルールの作成）、分析対象（1）～（3）別に各コードの出現数についてクロス集計し、カイ二乗検定を行った。

結　果

データの基本統計量

分析対象となったケース数は 2853 であり、何種類の語が含まれているかを示す「異なり語数」は 6095、各語の出現回数の平均は 8.21（SD=32.14）であった。

（1）診断時の年代別の病の語り

「(乳) がん」「手術」「病院」等、どの年代にも共通して出現した語も多い一方、たとえば「結婚」「妊娠」「出産」は 20・30 代、「感謝」は 50 代以上にしか見られず、40 代では「仕事」が特徴語になるなど、各年代の語りのキーワードが明らかとなった。語られたテーマにも相違が見られ、さらに、全年代に共通するキーワードであっても、それが語られる文脈はさまざまであった。語りの内容を比較してみると、若年者ほど【家族】【友人・仲間】【患者会】といった身近な人々についての語りや【女性性・生殖】についての語りが多く（p<.01）、40 代では【仕事】についての語り、20・30 代では【再発・転移】に関する語りが他の年代に比べて多いことがわかった（それぞれ p<.01、p<.05）。【心理的苦痛】に関してはどの年代においても語りの約 20%を占め、年代での有意差はなかった。

（2）経過年数で見た病の語り

診断を受けてから 5 年未満の群では、「手術」や「治療」「病院」が特徴語として挙げられ、5 年以上の群に比べて【医療関係】（p<.01）・【治療】（p<.05）についての語りが多かった。また、5 年未満の群では、【生活】（p<.05）・【仕事】（p<.01）に関する語りも多くみられるとともに、【心理的苦痛】もより多く表現されていた（p<.05）。一方、5 年以上の群では、【患者会】（p<.05）や【宗教（性）】（p<.01）に関わる語りが多くみられ、「夫」や「子ども」が特徴語となり、病の経過による語りのテーマの特徴が捉えられた。

（3）治療法で見た病の語り

治療法によって、語りのキーワードやテーマはさまざまであった。たとえば、化学療法有群では無群に比べて【再発・転移】【経済・保険】（p<.01）、【女性性・生殖】【家族】【仕事】（p<.05）に関する語りが多いなどの結果が得られた。

考　察

診断時の年代や、経過年数、治療法によって乳がんという病の体験の語りは異なり、重要なテーマや、懸念していること、拠りどころとしているもの等に違いが見られた。病の経過の中で、体験者の置かれた状況を鑑み、その体験世界や援助のニーズを個別的に理解していく必要があると言える。

追記：発表に関連し、開示すべき利益相反関係にある企業等はありません。本研究は、JSPS 科学研究費（JP16K044002）の助成を受けました。

(SURUJI Mayumi)